

追 悼



横山 巖 (よこやま いわお)

1926 年 1 月 12 日 (誕)

2008 年 6 月 24 日 (逝 82 歳)

学 歴

1944 年 10 月 東京帝国大学医学部医学科入学

1948 年 9 月 東京大学医学部医学科卒業

職 歴

1948 年 10 月 東京大学医学部附属病院にてインターン

1949 年 10 月 東京大学医学部物療内科入局

1950 年 5 月 東京大学医学部物療内科研究生

同年 10 月 文部教官 (東京大学助手, 医学部附属病院物療内科)

1952 年 10 月 東京大学医学部物療内科研究生

1956 年 7 月 長野県厚生連鹿教湯温泉療養所長

1960 年 4 月 文部教官 (東京大学助手, 医学部附属病院物療内科)

同年 9 月 順天堂大学医学部非常勤講師 (物理療法学担当) 兼務

1961 年 1 月 日産厚生会玉川病院内科医長

1963 年 7 月 ニューヨーク大学医学部物理医学兼リハビリテーション科に留学 (World Rehabilitation Fund の fellow として resident 勤務)

1964 年 9 月 日産厚生会玉川病院内科部長

1966 年 4 月 東京大学医学部非常勤講師兼務

同年 11 月 社会福祉法人神奈川県老人福祉事業団七沢理学診療病院長

1973 年 4 月 社会福祉法人神奈川県総合リハビリテーション事業団七沢老人リハビリテーション病院長

1985 年 4 月 社会福祉法人神奈川県総合リハビリテーション事業団七沢リハビリテーション病院脳血管センター院長

1991 年 4 月 社会福祉法人神奈川県総合リハビリテーション事業団顧問

1991 年 5 月 北里大学客員教授

1994 年 4 月 ~ 2000 年 12 月 北里大学医療衛生学部教授

社会的活動

1970 年 4 月 厚生省・中央社会福祉審議会臨時委員

1971 年 4 月 厚生省・中央社会福祉審議会委員

1979 年 4 月 厚生省・中央社会福祉審議会臨時委員

1981 年 8 月 厚生省・中央社会福祉審議会委員

1965 年 12 月 厚生省・理学療法士・作業療法士国家試験委員

1977 年 9 月 厚生省・理学療法士・作業療法士国家試験委員 (1978 年 ~ 1982 年は委員長)

1982 年 5 月 厚生省・医療関係者審議会理学療法士作業療法士部会委員 (1986 年 ~ 1990 年は部会長)

1979 年 2 月 厚生省・身体障害者福祉審議会臨時委員 (審査部会員)

1977 年 2 月 厚生省・厚生統計協議会専門委員

1987 年 8 月 厚生省・身体障害者福祉審議会委員

1977 年 環境庁・鉱泉分析法指針改定専門委員

1981 年 環境庁・温泉の禁忌症適応症改定検討会委員

1975 年 6 月 日本リハビリテーション医学会会長

1977 年 5 月 日本リハビリテーション医学会常任理事

1994 年 6 月 日本リハビリテーション医学会監事

1996 年 5 月 日本リハビリテーション医学会名誉会員

1978 年 5 月 日本温泉気候物理医学会会長

1990 年 4 月 日本温泉気候物理医学会理事

1975 年 4 月 日本脳卒中学会幹事

1983 年 6 月 日本脳卒中学会理事

1993 年 4 月 日本脳卒中学会名誉会員

1968 年 8 月 日本老年医学会評議員

1995 年 3 月 日本老年医学会特別会員

その他, 日本リハビリテーション病院協会会長 (初代), 神奈川リハビリテーション研究会会長 (第 2 代, 初代は土屋弘吉先生), 神奈川県自然環境保全審議会委員 (温泉部会員), 神奈川県成人病対策委員会委員, 神奈川県成人病検診管理指導協議会循環器疾患等部会部会長, 神奈川県社会福祉審議会委員, 神奈川県公衆衛生協会理事等を歴任した。

横山 巖先生を悼む

日本障害者リハビリテーション協会

上田 敏

横山 巖先生が2008年6月24日にお亡くなりになったと後になってから伺った。たしか82歳であられたはずである。最近はお会いする機会がなく、ご無沙汰していたが、まだそれほどのお歳というわけでもないの、非常に残念である。思い出をつらねて、ご冥福をお祈りするよすがとしたい。

先生と初めてお会いしたのは、1963年の初夏であるから45年前になる。二人ともラスク(Rusk HA)教授の主催するニューヨーク大学(NYU)リハビリテーション医学研究所に留学することが決まり、研究所の外郭組織である世界リハビリテーション基金(World Rehabilitation Fund、理事長はラスク)の奨学生という形になるので、財団からの奨学生任命証を在日アメリカ大使を通じて伝達するという事で二人が呼ばれたのである。当時の大使は日本で生まれ育って奥さんも日本人で、文化人大使として有名なライシャワー博士であり、赤坂のアメリカ大使館の古風な旧館で、大使立会いの下に二人が顔を合わせたという、「劇的」な(?)お会いのしかたであった。その時帰りがけに、虎の門の地下鉄までお話ししながら歩いたのが先生とお話した最初で、先生は間もなくニューヨークに旅立たれ、私は半年遅れでその年の暮れに発ったので、次にお会いしたのは1964年の正月のニューヨークであった。

もちろん先生のことはその前から存じあげていた。先生が初代院長を勤められた長野厚生連鹿教湯温泉療養所(現・鹿教湯三才山リハビリテーションセンター)にも見学にうかがったこともあったが、先生はすでに日産玉川病院に移られた後でお会いできなかった。まだ日本リハビリテーション医学会もなく(1963年夏には設立準備中で、その年の9月に創立)、同じ方向をめざす仲間たちの結集・協力場がなかったのである。

NYUでは半年前に行っておられた先生にいろいろなことを教えていただき、大変お世話になった。先生が半年過ぎた関連病院のGoldwater Memorial Hospi-

tal(ニューヨーク市立、老年医学的リハビリテーションの先駆者Dacso教授主宰)の後を私が引き継ぎ、やはり半年すごして研究所に移るときには先生はもう帰国されることになったので、一緒にはたらくことはなかったが、いろいろな研修会や行事ではよく顔を合わせた。

日本に帰られてからの先生のご活躍は知らぬ人はない。1966年には神奈川県立七沢病院の初代院長になられ、日本ではじめての脳卒中を中心とした公立のリハビリテーション病院の運営にあたられた。1975年には日本リハビリテーション医学会の会長になられ、翌1976年に第13回学会を横浜で開催された。その前から学会の学術用語委員長をつとめられ、シンポジウム・パネルディスカッションなどの座長もしばしばつとめられた。また会長をなさった後も学会の常任理事、監事などを長く歴任された。その後1991年からは北里大学で理学療法士・作業療法士の教育にあたられたこと、またこの間、厚生省の理学療法士・作業療法士国家試験委員長、同部会長などの要職につかれたこともよく知られている。

本誌「総合リハビリテーション」の創刊(1973)にも準備段階からかかわってくださった。横山先生は誠実な紳士的な方で、私のような後輩にもへだてなくお付き合いいただいた。いつももの静かだがよく考えておられ、心には強い正義感をもちたれていることがその時々には伝わってきた。本誌の名前を決めるときにも、「リハビリテーションは本来総合的なものなのだから、『総合』とつける必要はないのでは」とかなり強く主張されたのが印象的であった。「その通りですが、そう思わないで医学面だけと狭く理解されている場合が多いので、やはり『総合』が必要なのでは?」とお話して納得していただいたことも懐かしい思い出である。

思い出は尽きない。ご逝去をいたみつつ、安らかに眠られんことを祈りたい。